青森市埋蔵文化財調査報告書　第18集

三内丸山(2)遺跡

発掘調査概報

平成4年度

青森市教育委員会

序

青森県のほぼ中央に位置しております青森市は、北にむつ湾を、南に八甲田山系をひかえ、豊かな自然の食料資源を基盤に1万年もの大昔から人間の生活適地として悠久の歴史を歩み続け、今日人口30万の県都として発展してきております。

私たちの遠い祖先の時代から今日まで当市が人々にとって住みよい土地であったらしいことは、市内に200か所もの遺跡が所在していることからも窺い知ることができます。

特に本書に記載しております市内三内地区は、江戸時代の頃から土器の発見される場所として知られているほどであり、現在でも市内を代表する遺跡の宝庫として学術上貴重な地域であります。

この度、この三内地区に都市計画術路の敷設事業が計画され、予定路線が三内丸山（2）遺跡地内を通ることとなりましたことから、当委員会では、埋蔵文化財の取り扱いについて事業者側と協議を重ねてまいりました結果、事前に発掘調査を実施し遺跡の記録保存を図ることといたしました。発掘調査は、その調査面積が広大であることから平成4年度から2か年計画で実施することとしました。

本書は、三内丸山（2）遺跡発掘調査の1年次にあたる平成4年度に実施した分について、その成果を概報としてまとめたものであります。

本書が研究者はもとより市民各位にとりまして当市の歴史を紐解く鍵として、さらには文化財保護啓蒙にいささかでも役立つことができれば幸甚の至りと存じます。

最後となりましたが、ここに本書を刊行することができましたことは、調査指導員並びに調査員はじめ関係各機関・各位のご指導、さらには事業者である青森市都市開発部のご理解と三内地区各町会各位のご協力の賜ものによるものと、ここに深く感謝の意を表する次第であります。

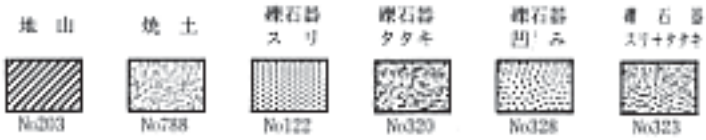
平成5年3月

青森市教育委員会
教育長　花　田　陽　悟

例　　言

1. 本書は、平成４年度に発掘調査を実施した青森市大字三内字丸山に所在する「三内丸山（2）遺跡」の発掘調査の概報である。三内丸山（2）遺跡の発掘調査は、平成4年度に調査予定区の南西部分を対象とし、平成5年度には残る北東部分を調査する予定である。このため、本年度は調査報告を概報とし、平成５年度には平成４年度調査分も合わせて本報告を刊行する予定である。
2. 本書は、概報のため記述を簡略化し、遺構や遺物についても概要を記載した。
3. 発掘調査は、青森市都市計画街路事業（3・4・15号里見丸山線）に先立って実施されたものである。
4. 発掘調査を実施した「三内丸山（2）遺跡」は、青森県遺跡台帳に、遺跡番号01021番として登録されている周知の遺跡である。
5. 本書に掲載してある図版の縮尺は、各図版ごとに表示してあるが、ないものは任意の縮尺である。なお写真図版については、縮尺の統一を図っていない。
6. 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森市教育委員会で保管している。
7. 本文中及び図版・表に使用した略称・記号・スクリーントーン等の表示内容は、次のとおりである。

Ｈ・住・住居跡―――竪穴住居跡　　土―――土壙　　埋―――埋設土器遺構
溝―――溝状遺構　　Ｐ―――土器　　Ｓ―――石器　　第１号土壙―――１土
スクリーントーンの表示は、次のとおりである。



8. 発掘調査並びに概報作成にあたり、次の機関・諸氏にご指導を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・青森山田高等学校・札幌市埋蔵文化財センター・江別市郷土資料館・北海道開拓記念館・秋川市教育委員会

秋元　武栄・水田　政雄・岩田　満・坂本　洋一・市川　金丸・三浦　圭介・成田　滋彦・畠山　昇・白鳥　文雄・岡田　康博・三浦　孝仁・阿部　美杉・小笠原雅行・古屋敷則雄・長崎勝巳・関谷　学・関根　輝雄

目次

序
例言
目次
第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査要項……1
　第3節　調査方法……3
　第4節　調査経過……5
第Ⅱ章　遺跡の概要……6
　第1節　遺跡周辺の自然環境……6
　第2節　周辺の遺跡……8
　第3節　遺跡の基本層序……10
第Ⅲ章　調査成果の概要……11
　第1節　A区の調査……11
　第2節　D区の調査……19
　第3節　B区・C区・E区の調査……26
第Ⅳ章　まとめ……30
写真図版……32

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第1節　調査に至る経過

平成3年、青森市では市内三内地区に都市計画街路事業（3・4・15号里見丸山線）の計画を明らかにした。市都市計画課より計画予定地内に埋蔵文化財包蔵地が含まれているかどうかの照会が市教育委員会にあった。それに対し、市教育委員会社会教育課では、予定地の大半が周知の埋蔵文化財包蔵地であることを通知するとともに、この遺跡の取り扱いについて事業者側との協議の結果、遺跡の記録保存として発掘調査を実施することとした。調査期間は、平成4・5年の2年間とした。

第2節　調査要項

1．調　査　目　的　平成4年青森市都市計画街路事業（3・4・15号里見丸山線）に先立ち、当該地区に所在する三内丸山（2）遺跡の発掘調査を実施し、その記録保存を図るとともに、地域社会の文化財活用に資する。

2．調　査　期　間　平成4年5月12日から平成5年3月31日

3．遺跡名及び所在地　三内丸山（2）遺跡
青森市大字三内字丸山275－1外

4．調　査　面　積　10，000㎡

5．調　査　委　託　者　青森市都市開発部

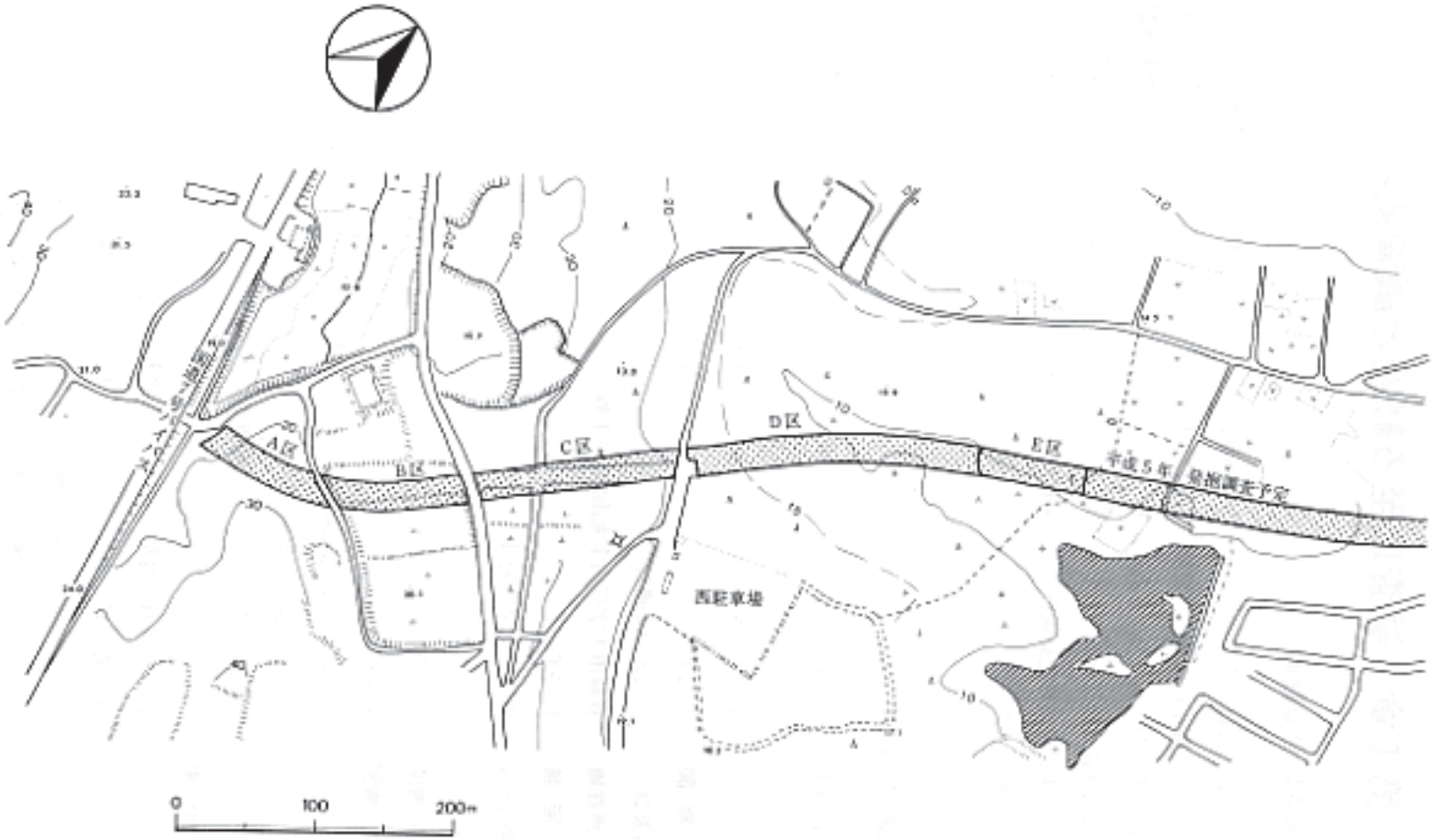
6．調　査　受　託　者　青森市教育委員会

7．調査担当機関　青森市教育委員会社会教育課

8．調査協力機関　青森県教育庁文化課
青森県埋蔵文化財調査センター
青森県青森土木事務所
財団法人青森県スポーツ振興事業団

9．調　査　体　制

調査指導員　村越　　潔　　弘前大学教授
調　査　員　小山　陽造　　八戸工業高等専門学校教授
高橋　　潤　　青森山田高等学校教諭



第1図　調査区名称

調査協力員　佐藤　俊勝　三内丸山町会長
調査事務局　青森市教育委員会
教　育　長　花田　陽悟
理事・教育次長　阿部祐之助
社会教育課長　寺沢松三郎
課長補佐兼埋蔵文化財係長　遠藤　正夫
指導主事　長沼　圭一
〃　徳差　義男
〃　小林　　淳
主　　事　武田　　均
〃　田沢　淳逸
〃　上野　隆博
調査補助員　永井　治・金山　晃道・松橋　寛佳・一戸久美子・工藤博美

第3節　調査方法

1．調査区域の状況

発掘調査の対象になっている範囲は、広大な範囲を有する三内丸山(2)遺跡全体のなかの南側にあたり、県総合運動公園の北西に位置している。予定路線は、環状7号バイパスから三内の清掃工場（南西から北東）に向かって、20m幅の約1kmである。調査面積は、平成4年10，000㎡、平成5年10，000㎡の計20，000㎡である。

調査対象の地域が広範囲にわたるため、遺跡全体を大きく環状7号バイパスからA・B・C・D・Eの五つの地区に便宜上区分した。ただし、B区は土盛りをしての更地、C区は大半が舗装された道路となっている。

2．クリッドの設定

調査区域が細長く南西から北東に向かって緩やかに弧を描いていることから、同一軸線によるグリッドの設定は困難であった。このため、A区とD～E区とそれぞれ単独に軸線を設定し、グリッドを設定した。（B区とC区は除外した。）

3．土層の呼称

自然堆積土層については、上位から下位へⅠ・Ⅱ・Ⅲとアラビア数字を、遺構内の覆土につ

いては同じく上位から下位へ1・2・3と算用数字を付すこととした。

4．粗掘り

粗掘りは、土層観察用のベルトを積しながら、グリッド単位で作業を進めることにした。粗掘りの探さは、第Ⅰ層（表土）から第Ⅴ層（地山ローム・最終的に無遺物層となる地山）上位付近までとした。

5．遺物の取り上げ方法

出土遺物のうち、遺構内のものについては、原則としてレベル・ポイント・出土層位を記載し、場合によっては微細図を作成したり写真撮影を行い取り上げることにした。遺構外のものについては、グリッド単位に出土層位を記載した。また、取り上げに際しては、色分けしたカード（土器一白、石器一青、その他一赤）を使用した。

6．遺構の調査

遺構は、調査区ごと各種類ごと確認順に番号を付した。遺構の精査は、原則として二分法ないしは四分法による平面・分層発掘で行った。

7．実測図の作成

平面図一原則として、簡易遣り方測量によって作成した。縮尺は竪穴住居跡・土壌は20分の1、埋設土器遺構は10分の1とした。

断面図一標準土層は20分の1の縮尺で、調査区域の主要な地点にセクションベルトを設け、土層断面図を作成した。遺構は、堆積状態と断面図を二方向にわたって作成した。断面図には、各層ごとの土色・しまり具合・粒径・混入物・湿性・粘性の注記・埋没過程・遺物のあり方・遺構の新旧関係・その他の所見を書き込むことにした。

8．写真紀録

発掘調査に欠かせない作業に写真撮影がある。特に今回のように調査終了後には消滅して道路に生まれ変わろうとしている場合は、活字では表現できない後世に如実に伝えられる貴重な資料が写真である。このような観点に立ち、調査中は適宜、遺構・遺物等の写真撮影を行うことに努めた。その際に使用するカメラは2台で、使用するフィルムはモノクロとカラーリバーサルの2種類とした。撮影は、平面プランの確認状況、堆積土層、完掘、遺物出土状況、その他随時作業風景等を記録した。

第４節　調査経過

5月上旬、発掘調査にあたって、関係機関の担当者と調査打ち合わせ会議を市役所で開催した。会議では、青森市都市計画街路事業（3・4・15号里見丸山線）の説明と発掘調査の要項及び方法について協議した。

調査は、平成４年５月12日から開始した。調査にあたりその便宜上、調査区を環状７号バイパスに近い方からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅと五つの地区に区分して作業を進めた。はじめは、試掘のためのA区と盛り土をして更地にしてあるB区と現在県総合運動公園西駐車場への進入路であるC区の草刈りを行い、Ａ区・Ｂ区・Ｃ区に杭打ち、仮グリッド設定及び粗掘り作業を進めていった。Ａ区は、当初は遺跡の隣接地ということで全面発掘調査ではなく、試掘調査を行い遺跡と確認した時点で、全面発掘調査をすることで進めた。５月下旬には、遺構や遺物を確認したので遺跡と判断し、調査委託者側に木の伐採を依頼し、全面発掘調査を行うこととした。
その間、Ｂ区・Ｃ区は盛り土と舗装された道路のため、遺構や遺物を確認できなかったので、Ｄ区の粗掘り作業を開始した。Ｄ区は木と笹と一部が水芭蕉の湿地であった。

6月になると、D区において、数箇所から遺物が出土しはじめ、グリッド単位で遺物の一括取り上げを行った。中旬になるとＡ区の木の伐採も終わり、下旬には下枝等を片付けて、再びＡ区でグリッドを設定し粗掘り作業を開始した。

７月になると、天気が良好で土が乾き地割れが生じてきたため、水をかけながら作業を行った。24日には、調査指導員の弘大村越教授が県埋蔵文化財調査センターの岡田主査と来跡した。また25日には、市民を対象にした遺跡の現地見学会を行った。発掘の体験を取り入れ、小雨の中117名の人が見学に訪れた。

８月になると、Ｄ区の土層観察用のベルトの除去作業と土層を観察するためのセクションを幅約2mで各地点実測した。17日には、教育長・理事・課長が来跡した。

９月になると、Ａ区・Ｄ区のほかにＥ区の租掘り作業に取りかかった。６日と12日には、『生涯学習のまちづくりフェスティバル』の一環として、一日市民縄文遺跡調査団を結成して、一般市民と児童生徒を対象に遺跡の発掘体験を行った。また24日には、市内の中教研社会科部会の先生方（30数名）が来跡した。

10月になると、Ａ区は法面の表土はぎ、Ｂ区は盛り土を確認するため２か所の掘り下げ、Ｅ区は排土を除去する作業に重機を入れた。７日には、社会教育指導員の先生方が５名、20日には、調査委託者側の都市開発部の部長・次長・参事が来跡した。下旬には、遺構の精査も終了し、30日をもって無事に発掘調査を終了した。

第Ⅱ章　遺跡の概要

青森県立黒石高等学枚数諭　工　藤　一　彌

第１節　遺跡周辺の自然環境

青森平野は新生代第四紀に形成された海岸平野であり、東西約10㎞、南北約5㎞のほぼ三角形をしている。北は陸奥湾に面し、南～東は八甲田山につらなる火山性の台地、西は標高50～50㎜の比較的緩傾斜の丘陵に囲まれている。西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大さな断層が存在しており、断層の東側が最大で800㎜も北に落ち込んだ事によって、平野が形成されていった。

南側の火山性台地は八甲陶カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結擬灰岩」からなる台地で、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に浸し、試錐データによると市の中心部では海面下500㎜付近まで達している。

西部の丘陵地は砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などからなり、最上位に火山灰層が堆積している。八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きくこつに区分され、そのうち１期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があり、従来の鶴ヶ吸層がこれに相当するという。2期のものは従来の田代平溶結鹿灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。

火山灰層は沢田（1970）により３層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と赤褐色浮石質降下火山灰よりなる、上位の月見野火山灰は黄褐色浮石質火山灰で浮石流～火山灰流の部分が多い。

本遺跡は西部の丘陵地の北東縁に位置する。A区は丘陵地の尾根が比較的急傾斜で沖館川の杖沢に落ち込んでいる部分に存在し、D区とE区は第四紀洪積世に形成された段丘上に存在する。浪館～三内にかけて標高10～30㎜の平坦面が分布しており、氷河時代の海水準変動によって形成されたもので、浪館段丘と呼ばれている。また、小規模ながら浪館段丘よりも低い標高５～10㎜にも平坦面が見られる。北の沖館川へとつづく谷底平野に向かって段丘面から緩やかに傾斜している南西側の緩斜面にD区、北東側の緩斜面にE区が位置している。北側の沖館川の沖積平野は250～300㎜の幅があり、北東方向へ約1㎞で青森平野へと続く。A区では石英粒の多い溶結擬灰宕の基盤の上に月見野火山灰と考えられる約60㎝の黄褐色火山灰が重なり、黒色土は10～20㎝と薄い。D区とE区でも石英粒の多い火砕流の粘土化した上部を基盤に月見野火山灰と考えられる褐色火山灰が重なる。火山灰と黒色土はその境界も複雑で、厚さも場所に

よって激しく異なるので、地形的にも侵食、再堆積した可能性がある。

なお、地形区分には1969年薩英の航空写真を使用した。

第２図　遺跡周辺の地形区分図

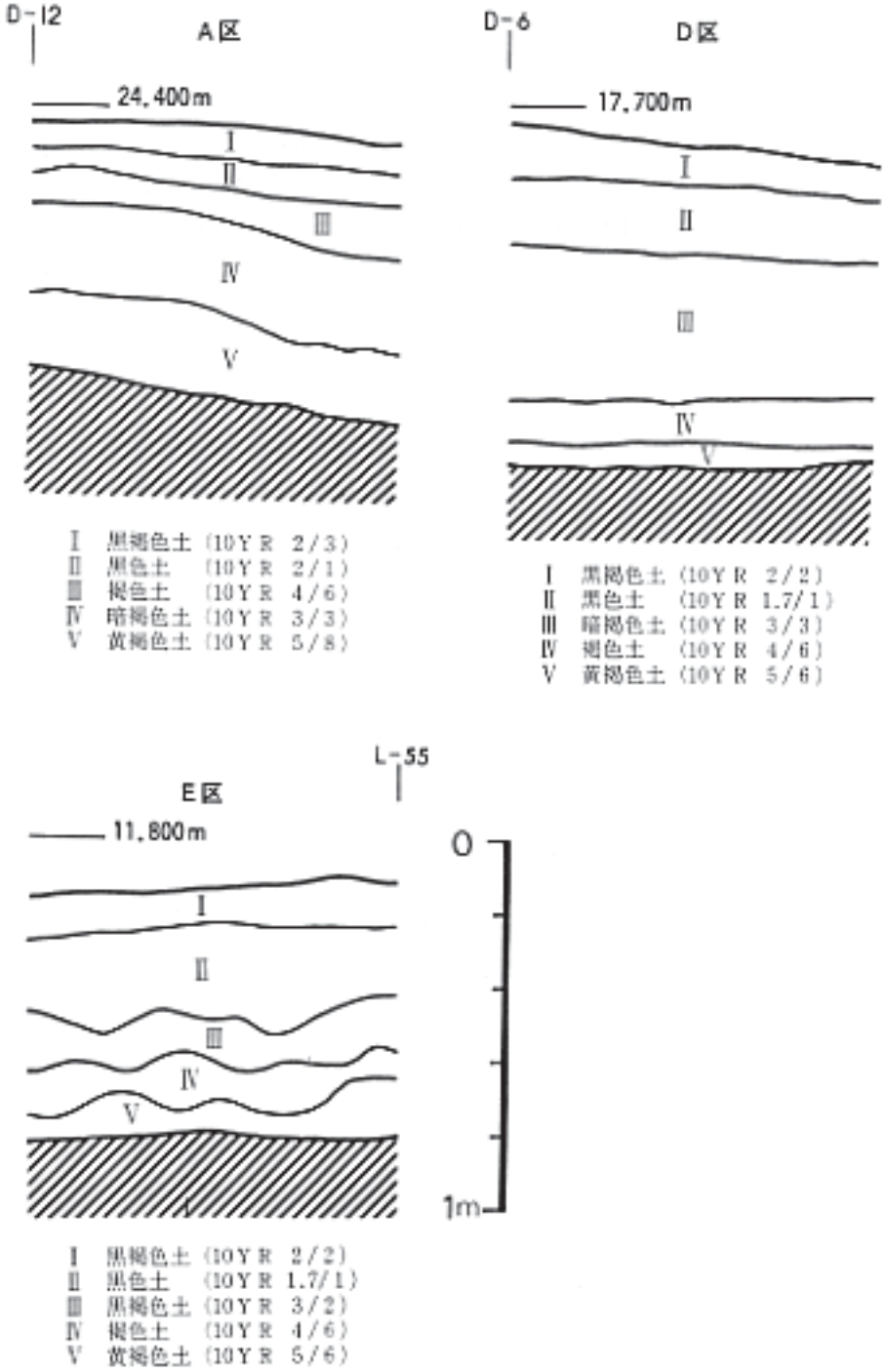
第２節　周辺の遺跡

青森市内の遺跡は平成４年度現在、205か所を数える。遺跡は主として青森平野周辺の標高10㎞から20㎞にかけての山沿いの台地ぎわに多く存在する。このことは、沖積平野である青森平野の地史を語るものであろうか。本遺跡の存在する台地周辺と沖館川をはさんだ台地上と三内川沿いには、多くの遺跡が散存している。

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　　代	備　　考	遺跡番号
1	三内丸山（2）	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後）	近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）、三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書第33集	21
2	三内丸山（1）	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後）・平安	三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書第33集	20
3	小三内	三内字丸山	散布地	縄（前・中・後）・平安	日本考古学年報８	17
4	近野	安田字近野・三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後・晩）・平安	近野遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ	65
5	三内	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後）・平安	三内遺跡埋蔵文化財一調査報告書第37集	19
6	三内沢部（1）	三内字沢部	集落跡	縄（早・前・中・後）・平安	三内沢部遺跡発掘調査報告書第41集	64
7	三内沢部（2）	三内字沢部	散布地	縄（中）		162
8	浪館（1）	三内字丸山	散布地	縄（前）		11
9	浪館（2）	浪館字平岡	散布地	縄（中・晩）		12
10	安田（1）	安田字近野	散布地	縄（前）		15
11	安田水天宮	安田字近野	散布地	縄（前・中・後）		14
12	安田（2）	安田字近野・細越字栄山	散布地	縄（前・中）		16
13	細越館	細越字栄山	集落跡	平安	『青森県の中世城館』	66
14	三内霊園	三内字平山	散布地	縄（前・中）	三内霊園遺跡調査概報	18
15	石江	石江字平山	散布地	縄（前）		56
16	江渡	石江字江渡	散布地	縄（前）		163

第3図　周辺の遺跡

第３節　遺跡の基本層序



第４図　遺跡の基本層序

第III章　調査成果の概要

第１節　A区の調査

本調査区域は、青森市西部の三内・安田地区を構成する台地の西側に位置し、この台地から北西に小さく突き出る小丘陵の先端部に位置する。丘陵の北側500m先には沖館川の沖積地が広がり、これに連なる沖積地が丘陵及び台地の北側から西側へ沢状に回り込んでいる。国道7号線バイパス（環状7号線）は、この沢状の地形を利用して敷設され、調査区西側に接するように通り、東北自動車道青森インターへ延びている。

調査区域は、小丘陵の東西を横断しており、ちょうど、馬の背状の地形にグリッドの網を鞍状にかぶせた形となっている。この丘陵の尾根部をたどると、上部が平坦面となっているが、調査区城南側は、この平坦面から下る傾斜地となり、丘陵全体の中で最も急な勾配（12°）を呈している。このような地形のためか、小丘陵一帯は杉や松などの植林地として利用されており、50年ほど前の様子を知る作業員の言によれば、それ以前は牧草地であったという。

調査開始直後、10cm弱掘り下げた時点で第Ⅱ層（包含層第1層）が現れ、また、空ビンが20cmほどの探さから出土するなど、元来上位に堆積していた層が排土になっているのではないかと思われたが、全体においての判断はできなかった。

調査の結果、遺物の包含層は、第Ⅱ層と第Ⅲ層上位（包含層第2層）であり、円筒上層c式の土器が第Ⅲ層中位で2片ほど出土している。

検出した遺構は、第Ⅴ層まで掘り下げた時点で確認した。遺構のほとんどが、前出の最も急な地点の北側（比較的緩やかな面）に集中し、特に、南北ライン7～11内にほぼ集中する。

本調査区域の面積は2，500㎡で、標高は15～30m内にある。

1．検出遺構　　竪穴住居跡3軒、土境18基、埋設土器遺構1基である。

(1) 竪穴住居跡

第2号竪穴住居跡（第6図、第7図、写真2）

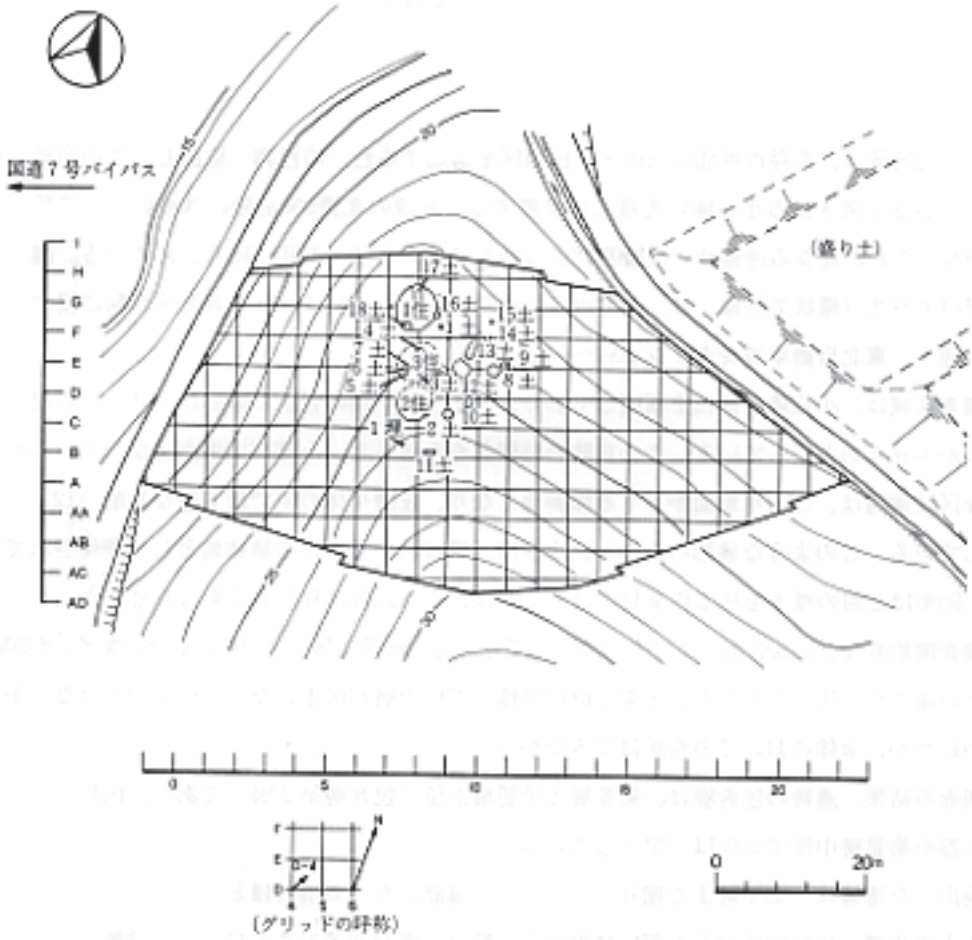
〔位　　置〕 C－7・8、D－7・8グリッド。

〔確認状況〕 第㈹層上面で黒色土の落ち込みを確認。

〔改　　築〕 柱穴状ビットの状況から改築があったと思われるが、プランは不明。

〔形　状〕 壁北半部を欠くが、不整円形（4．6×4．3m）であろう。

〔床　・　壁〕 床面は平坦、柱穴状ビット42・43号の東側及び9・13号ビット間が堅緻。壁北



第5図　A区遺構配置図

半部は確認できなかったが、残存部では急な立ち上がり方をしている。

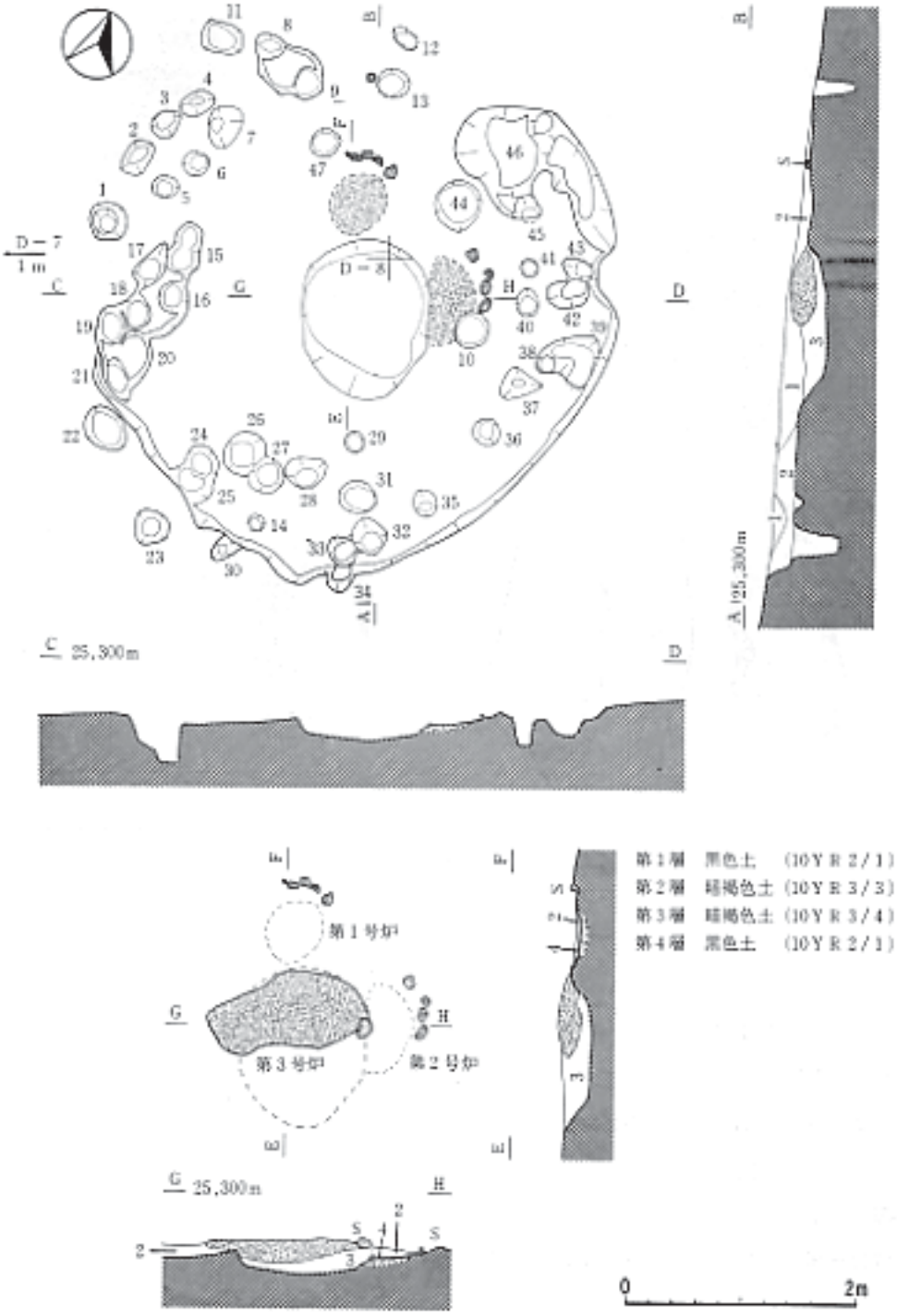
〔覆　　土〕 黒色土と暗褐色土が主体で、ともに炭化物・ローム粒が混入。

〔　　炉　　〕石囲炉2基、床面を掘り込んだ炉1基を検出。2号炉は3号炉と10号ピットに切られている。3号炉では焼土に接し焼石が1個出土し、石囲炉の可能性がある。

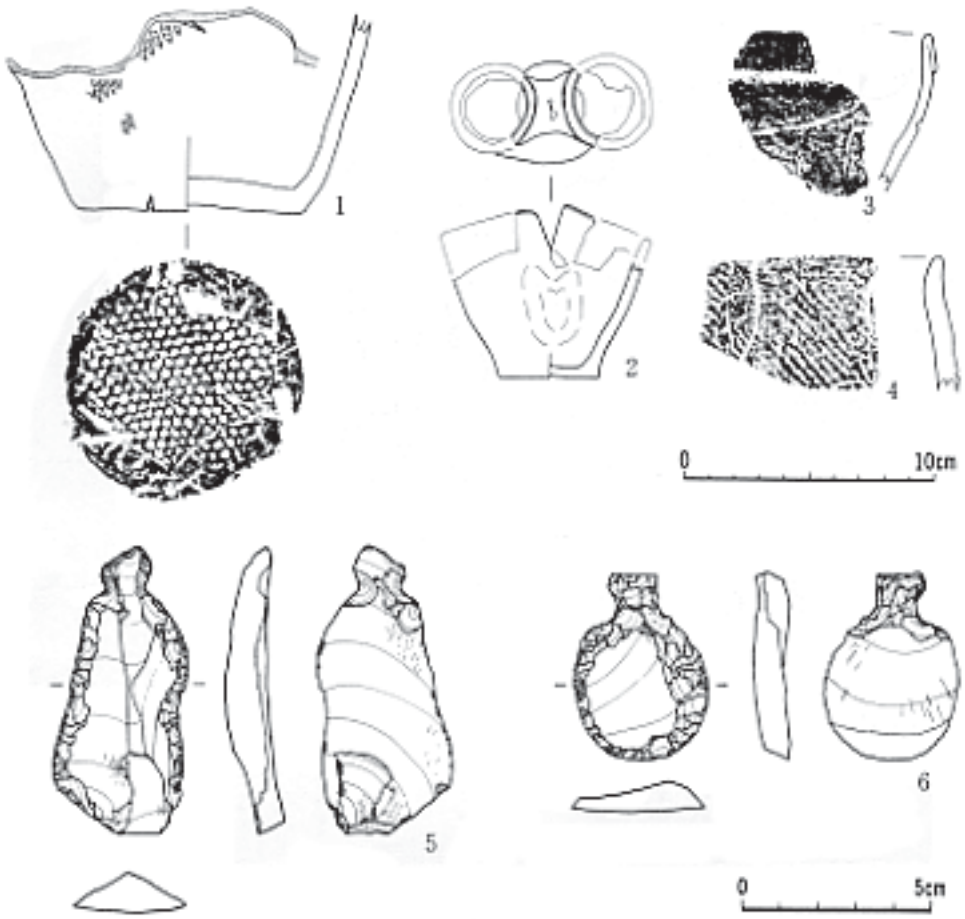
〔柱　　穴〕 床面に柱穴状ピット44個。22・23・30号ピットの性格は不明。

〔出土遺物〕 床面から深鉢形土器底部（第7図1）が倒立し出土。覆土中からは、土器片・磨製石斧の破片・石匙（5・6）・フレイク等が出土。また、2号ピットから双口状の袖珍土器（2）が出土。

〔時　　期〕 床面出土と覆土中の土器から縄文時代中期末葉と思われる。



第6図　第2号竪穴住居跡



第７図　第２号竪穴住居跡出土遺物

(2) 埋設土器遺構

第１号埋設土器遺構（第８図、写真３）

〔位　　置〕 Ｂ－７グリッド。

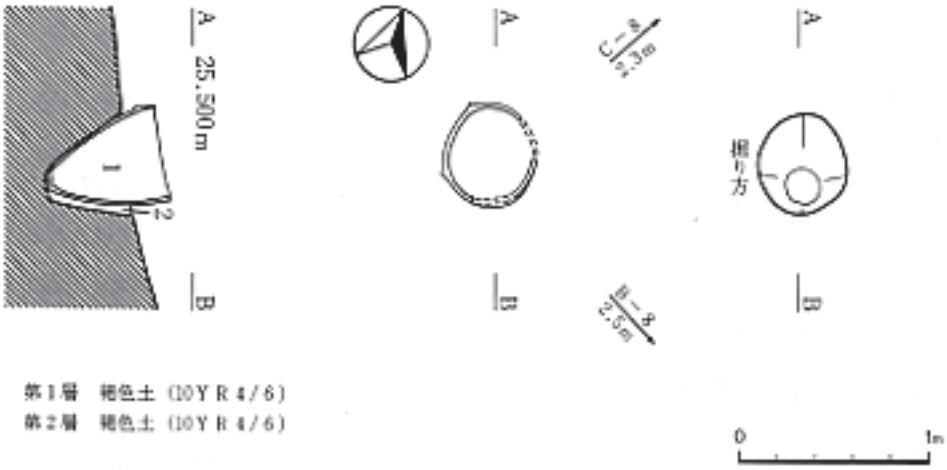
〔確認状況〕 第㈼層調査中に確認。

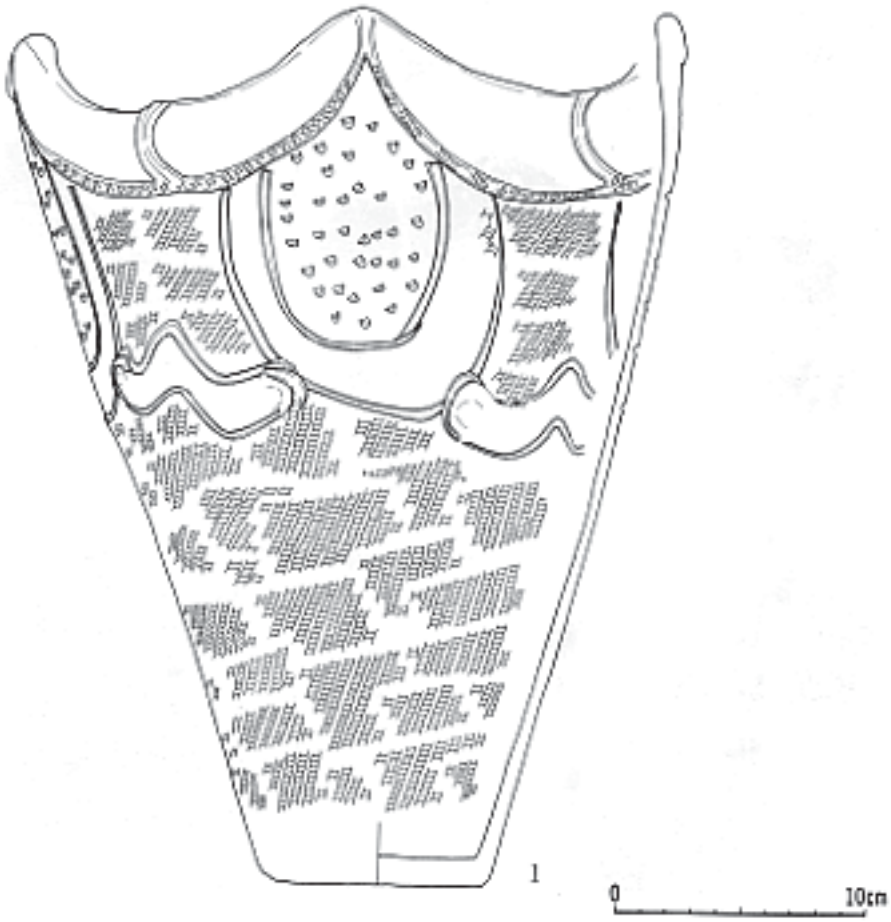
〔形　　状〕 円形（27×24㎝）の掘り方で、土器は、掘り方西壁に接し、若干傾く状態で埋設。

〔覆　　土〕 ２層に分けられる。炭化物は見られない。

〔埋設土器〕 ほぼ完全な状態で出土（第８図１）。胴部中央に煤等の炭化物が付着し、その直下、底部が赤変しているが、本遺構による現象ではない。

〔時　　期〕 土器の文様から、縄文時代中期末葉、大木10式併行期と思われる。





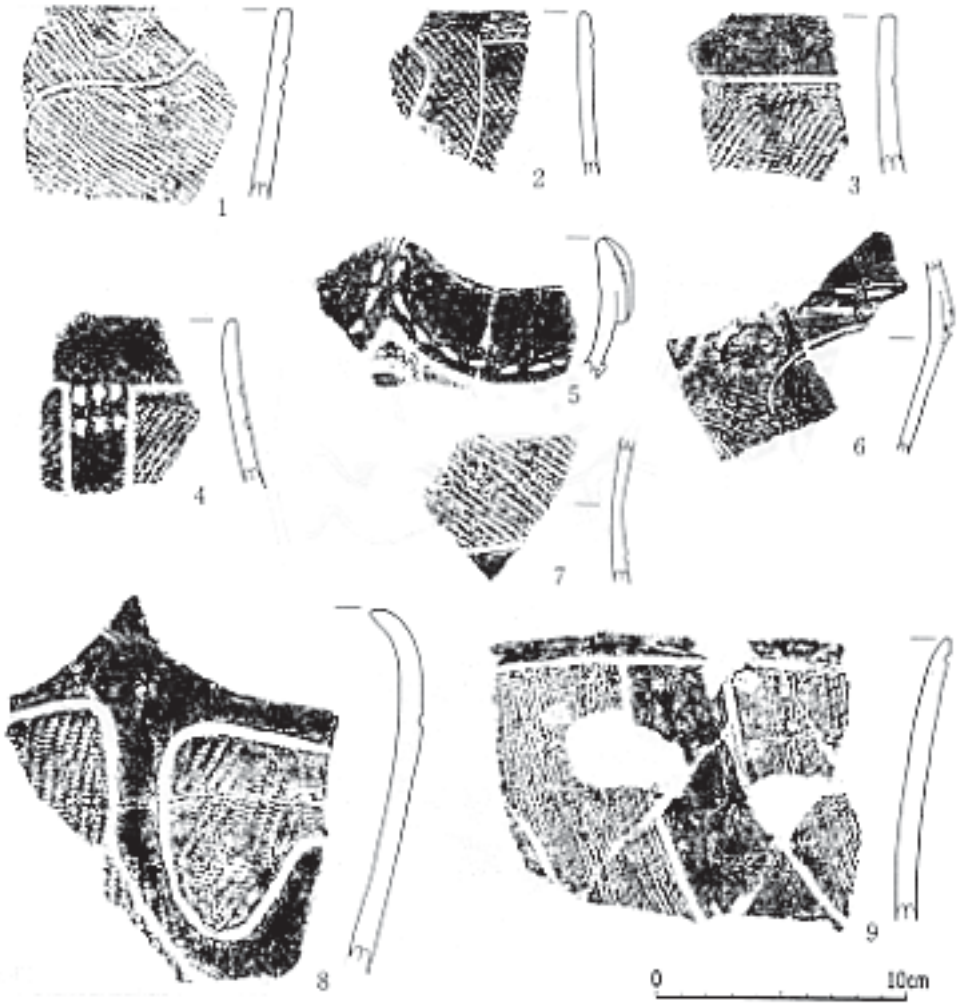
第８図　第１号埋設土器遺構及び埋設土器

2．出土遺物　　土器（ダンボール18箱）、石器（同8箱）である。

(1) 土　器　　主体となるのは、縄文時代中期末葉と晩期のものである。

縄文時代中期末葉の土器（第9図）

大木10式併行期の土器に比定される。器形は、深鉢形である。施文技法には、地文縄文に沈線、磨消縄文（一部に充填縄文も）、刺突文を施すものが見られる。地文となる縄文は、単節の縦位回転が主だが、撚糸文も見られる。文様構成は、完形個体が少ないため全体像を把捉できないが、沈線や磨消による「L字状」や「U字状」などと思われる。口縁部には平口縁と波状口縁があり、後者は、微隆起帯や鰭状の隆起をもち、胴部に磨消縄文を施している。



第9図　縄文時代中期末葉の土器

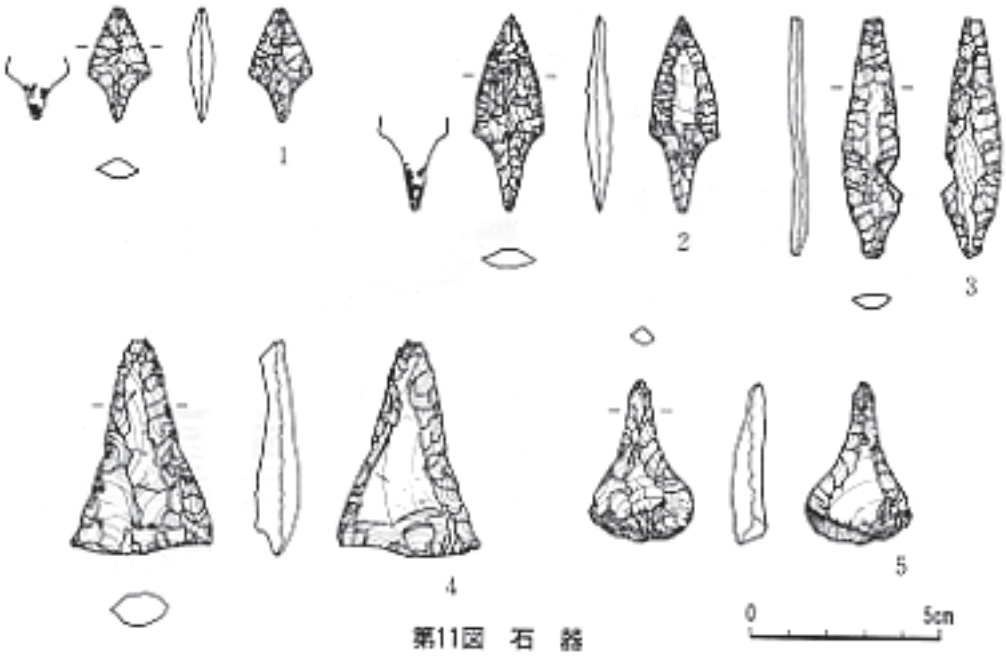
縄文晩期の土器（第10図）

大洞BC～C_1式の土器に比定される。器種は、鉢形（深、浅、台付）系の破片が多く、壷形、皿形も見られる。主文様帯に羊歯状文が施されているが、そのモチーフは、平行沈線間の刻目や列点文状の刺突の様相が強く、BC末期あるいはC_1初期のものかもしれない。また、羊歯状文が施文される部位に、平行沈線に挟まれた横長の刺突が行われるものもある。

第10図　縄文時代晩期の土器

(2) 石器（第 11 図）

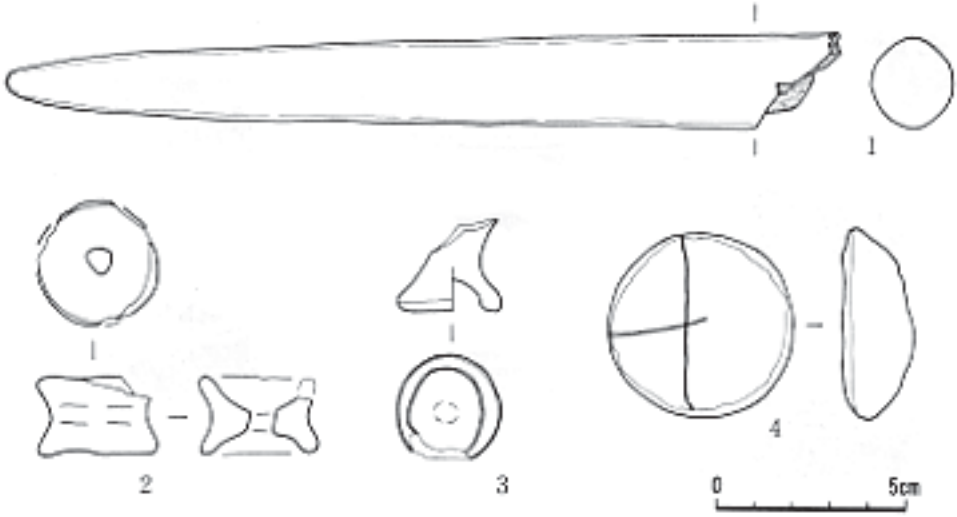
石鏃、石匙、石篦、石錐、磨製石斧、礫石器等が出土している。



第11図　石　器

(3) その他の遺物（第 12 図）

袖珍土器、滑車形土製耳飾、円盤形の土製品、石棒（石剣）等が出土している。



第12図　その他の遺物

第２節　Ｄ区の調査

Ｄ区は、県総合運動公園西駐車場から北側に緩やかに傾斜した台地の縁辺部にあたり、標高18～13ｍの平坦地と標高約11ｍの以前水田として利用されていた湿地からなる約4，000m2が調査対象区域である。本遺跡から南方約40ｍにある西駐車場は、昭和51年に青森県教育庁文化課で発掘調査した縄文時代中期末葉の土壙墓群を検出した区域である。

Ｄ区の黒色土Ⅱ層は、標高の高い方が約50cmほどの厚さがあり、標高が低くなるにつれてだんだん黒色土の厚さが薄くなっている。遺物の出土状況は、ほとんどのグリッドで地表面から20～30cmのⅡ層から出土し、Ⅱ層下部からⅢ層上部にかけて出土量が少なくなり、また湿地に向かうほど遺物の出土量は減少している。土器は、まとまって出土するというわけではなく、散布しているという状態で、摩滅したものやもろい土器が多くみられる。轢石器は多量に出土している。

Ｄ区の遺跡としての性格は、西駐車場との約40ｍの間が未調査のため不明であるが、この区域を含め周辺に居住していた人々の土器の捨て場にしては、復原可能な個体数が極めて少なく、また現在の地形から沖館川の支流か別の川が近くにあり、出土遺物が流れ込んできた可能性も低いことから短い間の捨て場であったと推察される。

1．検出遺構　竪穴住居跡１軒、土壙21基、溝状遺構１基である。

(1) 竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（第14図、写真8）

〔位　　置〕　Ｈ－13グリッド。

〔確認状況〕　Ⅳ層上面で円形の落ち込みを確認。

〔形　　状〕　ほぼ円形で、直径2．8ｍ。

〔床　・　壁〕　床面はほぼ平坦で北側に堅緻な面がみられ、壁は緩やかに立ち上がっている。

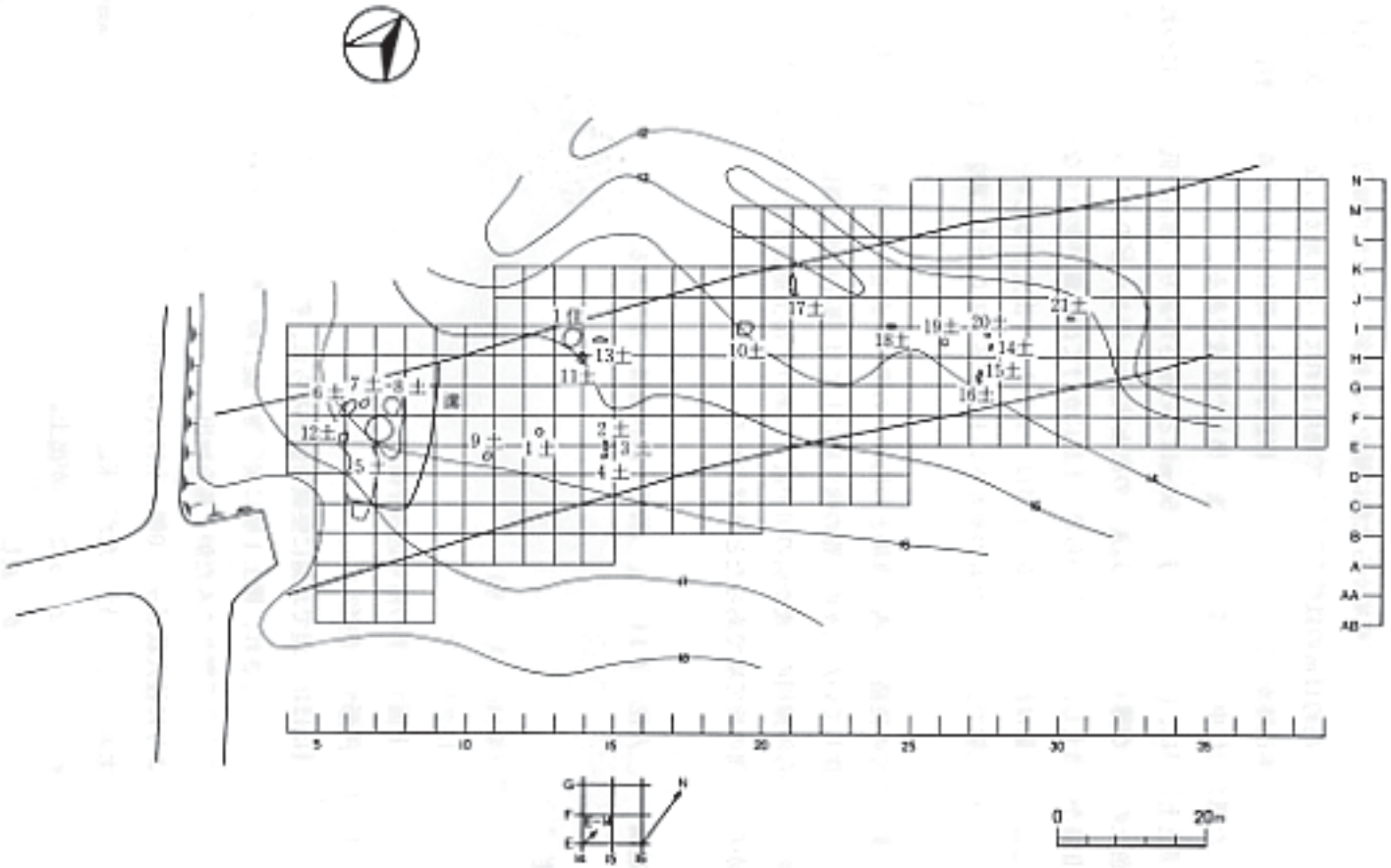
〔覆　　土〕　２層に分層され、覆土１層に炭化物・焼土粒、覆土２層にローム粒が混入。

〔　炉　〕　床面を若干掘りこんだ炉１基を検出。

〔柱　　穴〕　壁よりに柱穴状ピット10個。主柱穴は不明。

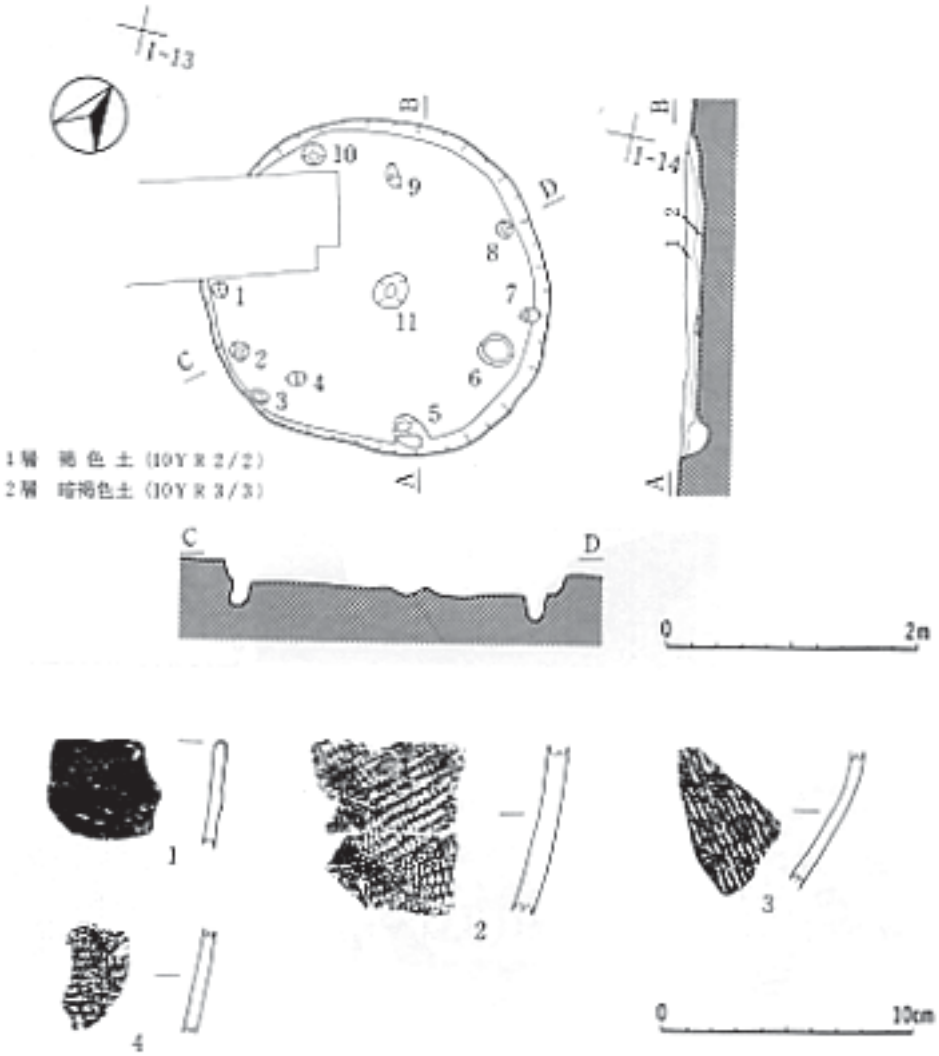
〔出土遺物〕　覆土より土器が出土したが、床面直上からの出土遺物はない。炉西側30cmの覆土１層に赤色顔料を塗った石棒が出土。

〔時　　期〕　出土土器の器面が磨滅し、胴部細片ばかりで時期を特定することは難しい。



（グリッドの呼称）

第13図　D区遺構配置図



第14図　第１号竪穴住居跡及び出土遺物

(2) 土　壙

第10号土壙（第15図、写真8）

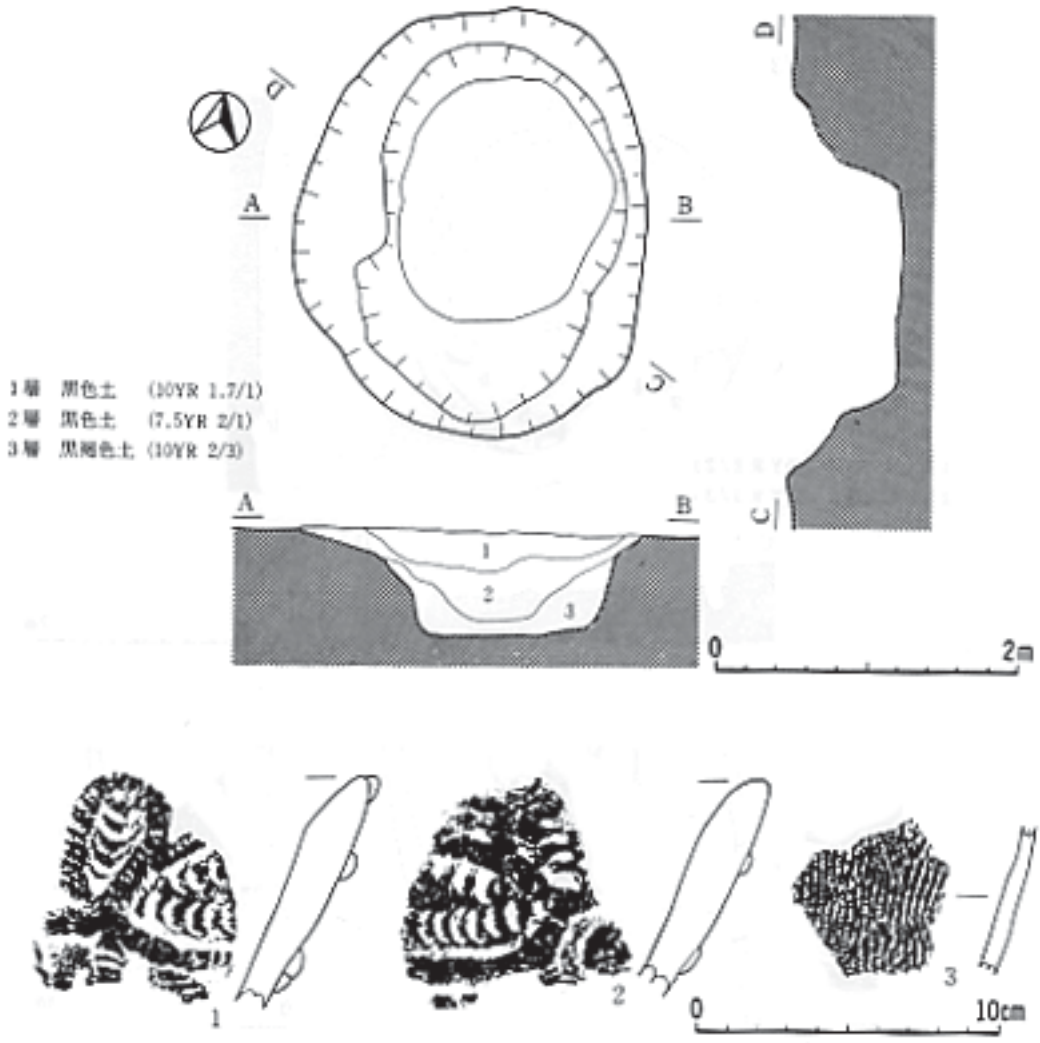
〔位　　置〕 H－19、㈱一19グリッド。

〔形　　状〕 不整円形（2．8×2．3m）。

〔覆　　土〕 3層に分層され、覆土2層に砂粒が混入。

〔出土遺物〕 覆土3層より円筒上層b式と考えられる土器片が出土。

〔時　　期〕 縄文時代中期前半と考えられる。



第15図　第10号土壙及び出土遺物

第11号土壙（第16図、写真8）

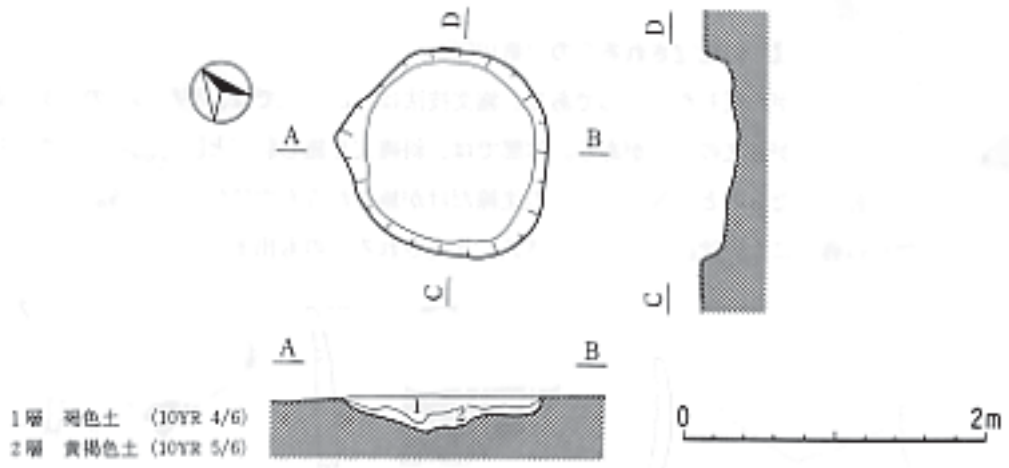
〔位　　置〕 G－11グリッド。

〔形　　状〕 円形（1．4×1．4m）。

〔覆　　土〕 2層に分層され、ローム粒が混入。

〔出土遺物〕 出土していない。

〔時　　期〕 不明。



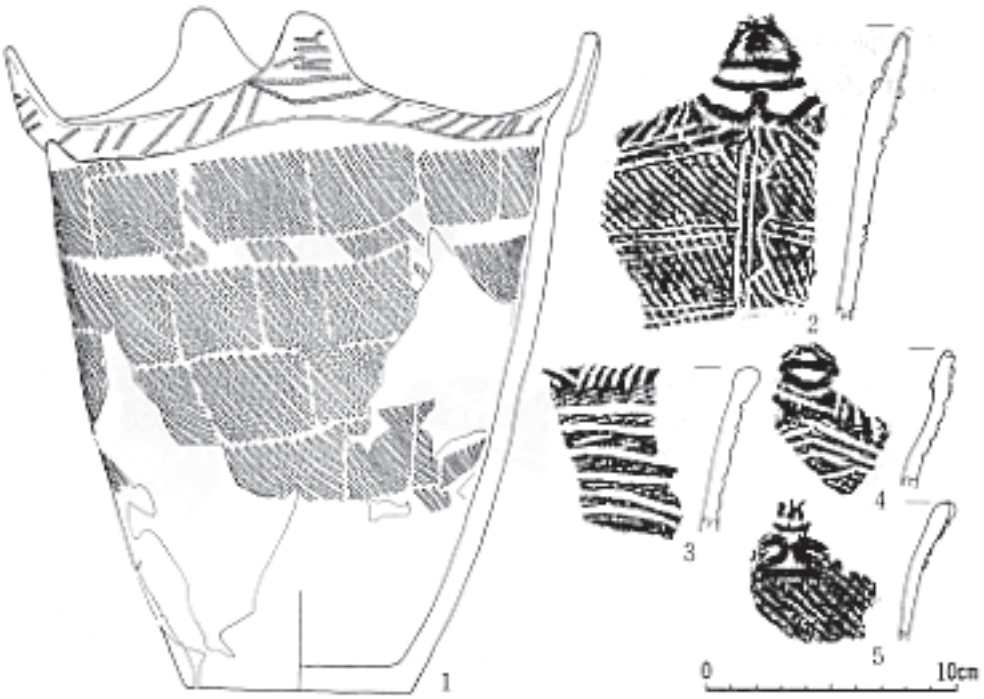
第16図　第11号土壙

2．出土遺物　土器（ダンボール 18 箱）、石器（同 14 箱）である。

（1）土　器　　主体となるのは、縄文時代中期末葉期のものである。

円筒上層 e 式に比定されるもの（第 17 図）

器形は、四つの山形突起を有した深鉢形である。施文技法は、山形突起で粘土ひもを張り付けたものと縄文の圧痕を施したものがある。口縁部は、縄文の圧痕が施されている。体部では、斜縄文が施され頸部に数条の沈線を有するものとないものに分けられる。

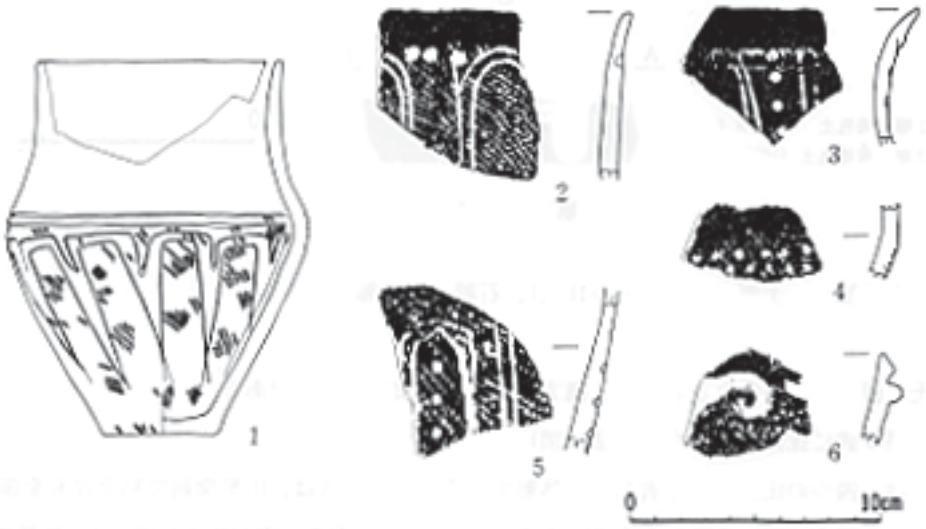


第17図　縄文時代中期末葉の土器(1)

最花式（中の平III式）に比定されるもの（第 18 図）

器形は、口頸部が内反した深鉢形である。施文技法は、口縁部では、平縁のものと折り返されたものと口頸部が無文のものがある。体部では、斜縄文を施し刺突と縦方向の楕円や半円の沈線を組み合わせたものと、楕円や半円の沈線だけが施されるものに分けられる。

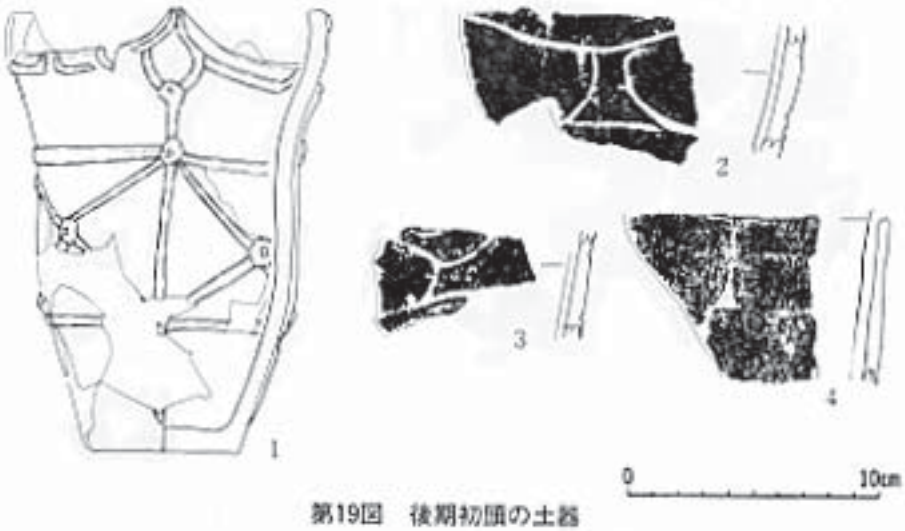
その他に口唇部に太い沈線を施した榎林式に比走されるものも出土している。



第18図　縄文時代中期末葉の土器(2)

その他の時期の土器（第 19 図）

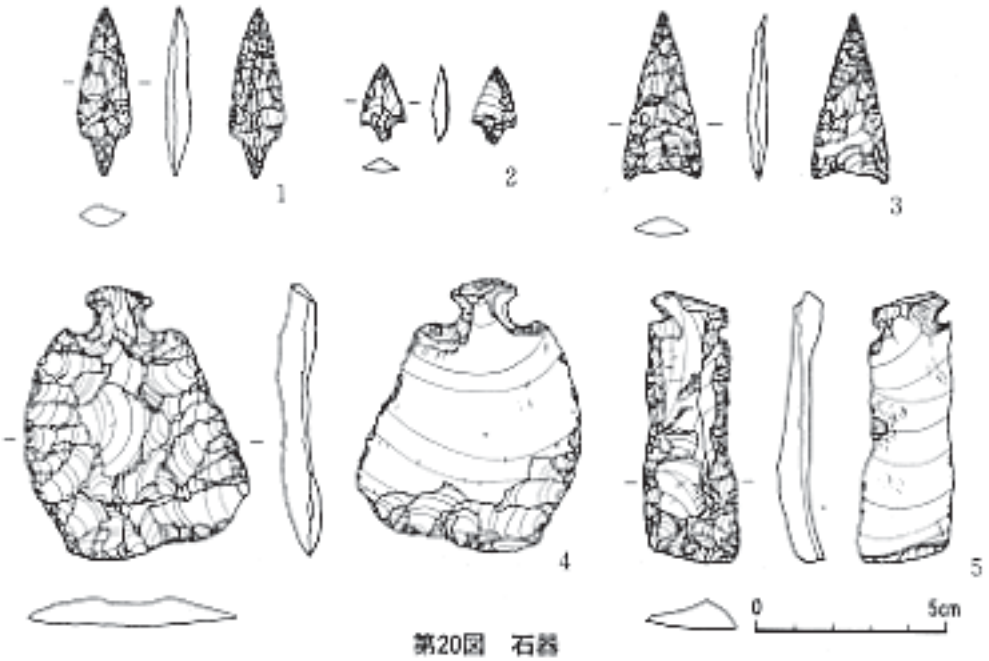
中期前半の円筒式上層ｂ式、好奇初頭の牛ヶ沢式・十腰内Ｉ式に比定されるものが出土した。



第19図　後期初頭の土器

(2) 石器（第 20 図）

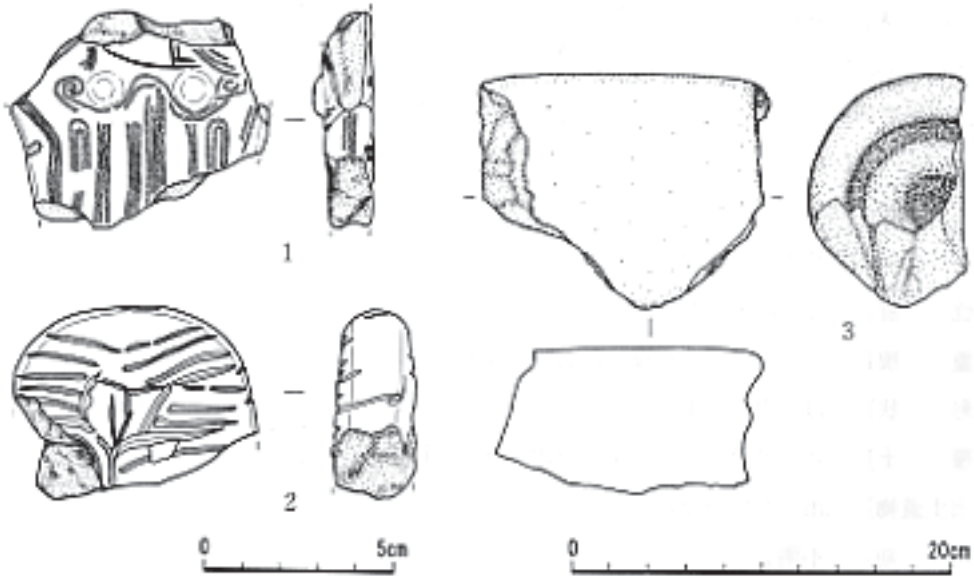
石鏃、石匙、磨製石斧、礫石器等が出土した。



第20図　石器

(3) その他の遺物（第 21 図）

土偶、土版、石棒等が出土した。



第21図　その他の遺物

第３節　Ｂ区・Ｃ区・Ｅ区の調査

Ｂ区の調査

Ｂ区は、約2，000㎡の対象範囲でその大半が盛り土の更地であった。確認のためトレンチを数箇所設定し、約400㎡粗掘りした。土はやはり排土と思われる石まじりの土であった。調査の後半には、重機を入れて確認を行った。その結果、地表面から４～5ｍの探さで自然堆積と思われる黒土層を確認したが、遺物等は出土しなかった。

Ｃ区の調査

Ｃ区は、約3，600㎡の対象範囲でその大半が舗装された道路で占められているため、実質的な調査は不可能であった。

Ｅ区の調査

Ｅ区は、湿地から緩やかな上り傾斜となる約1，600㎡を調査対象区域とした。Ｄ区からのグリッド番号の50ラインから75ラインまでを今年度発掘調査した。また、59ラインから67ラインまでは、排土と思われるかたい混土と厚い自然堆積と思われる黒土層であったため、上位の排土については重機により除去作業を行った。その結果、厚い所では、1ｍを越す黒色土層の下に、「さるけ」と呼ばれている泥炭土が約1．5ｍの厚さで堆積していた。また、60ラインから62ラインにかけて、沢のような落ち込みを確認した。遺物は出土しなかった。

1．検出遺構　土壙５基、埋設土器遺構３基である。

（1）土　壙

第１号土壙（第23図、写真12）

〔位　　置〕　Ｋ－74・75グリッド。

〔重　　複〕　第２号土壙と重複。新旧関係は不明。

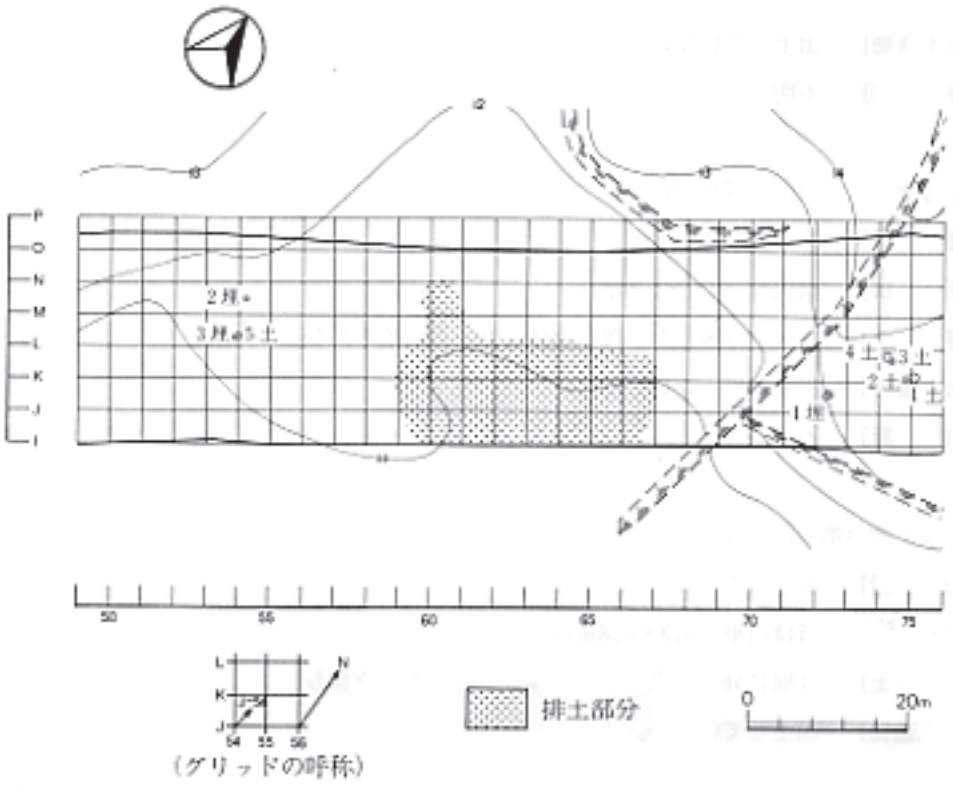
〔形　　状〕　ほぼ円形（1×0．9ｍ）。

〔覆　　土〕　８層に分層した。覆土全体にローム粒子を含む。

〔出土遺物〕　出土していない。

〔時　　期〕　不明。

第２号土壙（第23図、写真12）



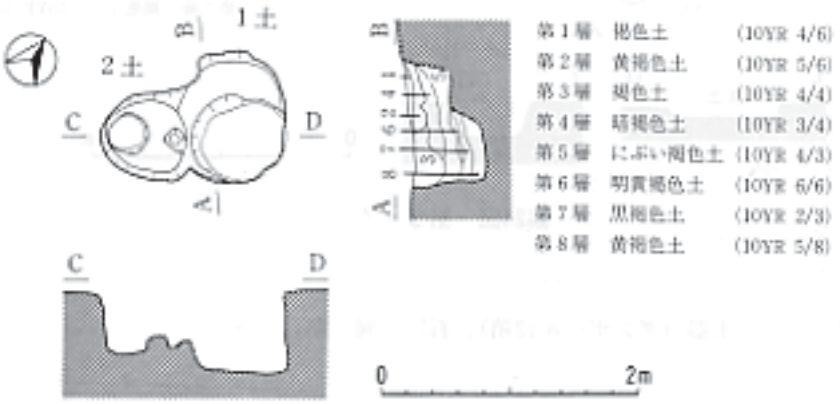
第22図　E区遺構配置図

〔位　　置〕 K－74グリッド。

〔重　　複〕 第1号土壙と重複。新旧関係は不明。

〔形　　状〕 円形（0．7×0．7m）。

〔覆　　土〕 土層断面図を作成していないので不明。

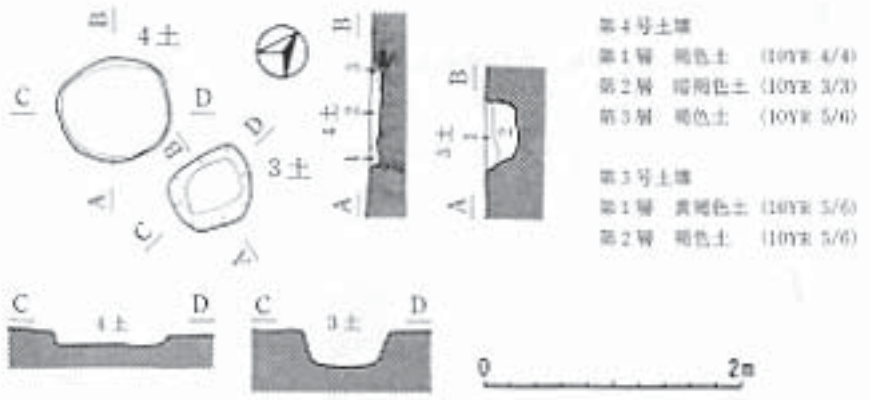


第23図　第1・2号土壙

〔出土遺物〕 出土していない。
〔時　　期〕 不明。

第3号土壙（第24図、写真12）
〔位　　置〕 K－74グリッド。
〔形　　状〕 楕円形（0．7×0．6m）。
〔覆　　土〕 2層に分層した。覆土全体にローム粒子を含む。
〔出土遺物〕 出土していない。
〔時　　期〕 不明。

第4号土壙（第24図、写真12）
〔位　　置〕 K－74グリッド。
〔形　　状〕 ほぼ円形（0．9×0．8m）。
〔覆　　土〕 3層に分層した。覆土全体にローム粒子を含む。
〔出土遺物〕 出土していない。
〔時　　期〕 不明。



第24図　第3・4号土壙

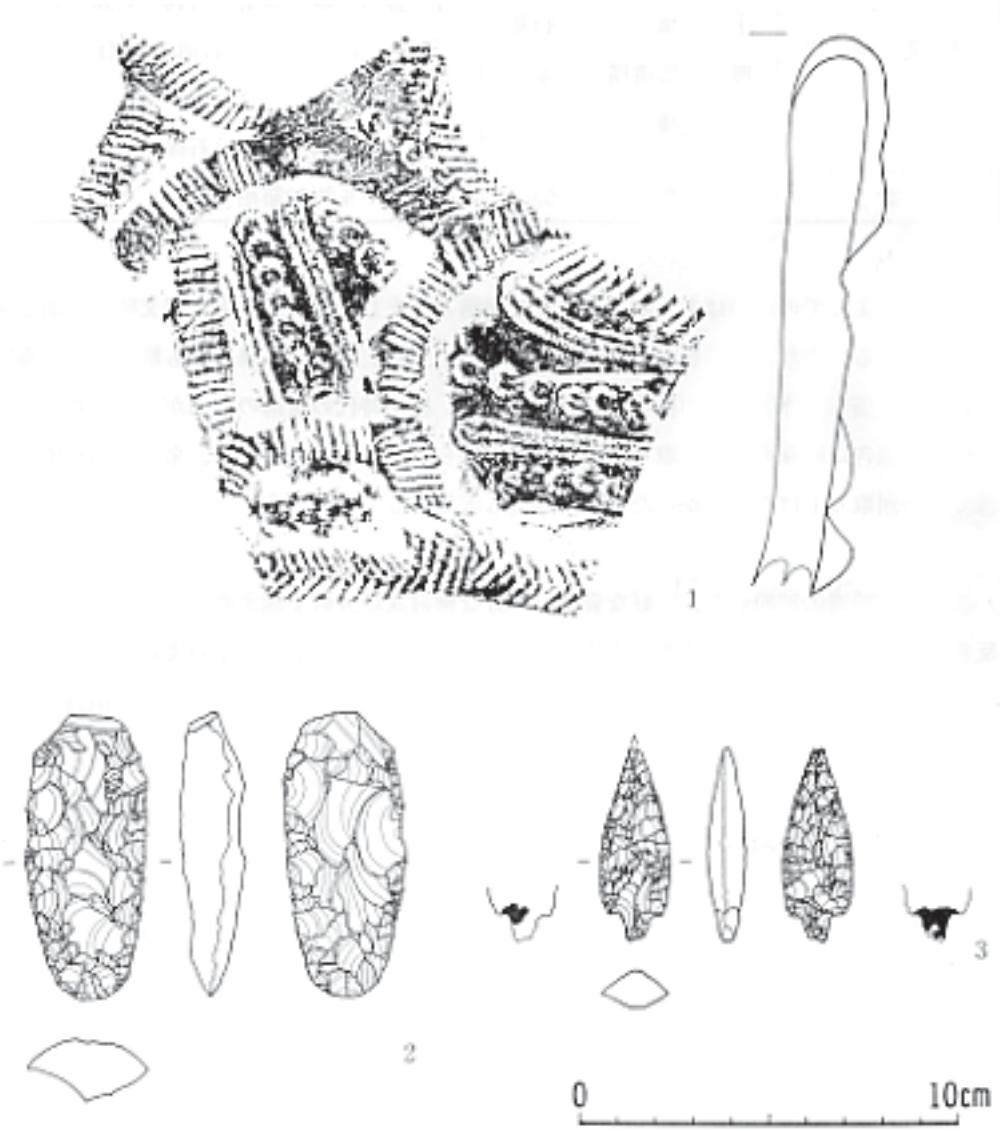
2．出土遺物　土器（ダンボール12箱）、石器（同8箱）である。

(1) 土　器　　主体となるのは、縄文時代中期前半期である。
縄文時代中期前半期の土器（第25図）

E区から出土している土器の主体を占めるものは、円筒上層b式に比定できる土器である。施文技法は、口縁部文様帯間の撚糸による爪形圧痕文と隆帯に沿った数条の押圧縄文である。器形は深鉢形を宜し、口縁部は弁状突起を有する波状口縁と平口縁があり、比較的厚手で外反している。胴部文様は、結束のある羽状縄文が横位に施されている。

(2) 石　器（第25図）

石鏃、石箆、磨製石斧、轢石器等が出土した。



第25図　出土遺物

第Ⅳ章　ま　　と　　め

今回の発掘調査で検出・出土した遺構と遺物は、次のとおりである。

	遺　　構	遺　　物
縄　文　時　代	竪穴住居跡　　4軒 土　　壙　　44基 埋設土器遺構　　4基 溝状遺構　　1基	土　器（中期・後期・晩期） 石　器（石鏃・石槍・石匙・石錐・石箆・敲磨器類・石皿・凹石・磨製石斧） その他（土偶・耳飾・石棒）
計	総検出数　　53	ダンボール約80箱相当量

調査区によっての違いはあるが、検出した遺構と出土した遺物の大半は縄文時代中期と晩期のものである。また、少量ながら後期の遺物も出土した。さらに、来年度も継続調査する区域では、土師器・須恵器を表面採集することができ、歴史時代の遺構の検出が期待される。

今回の報告は概報のため、取り上げた資料が限られたものとなったが、来年度刊行する報告書で、今回取り上げられなかった未報告資料も記載する予定である。

紙面及び時間的制約から、良好な資料を十分な検討及び分析を加えぬままで報告したことを反省するとともに、今回の成果が今後の調査及び研究の一助となれば幸いである。

（担当者一同）

写　真　図　版

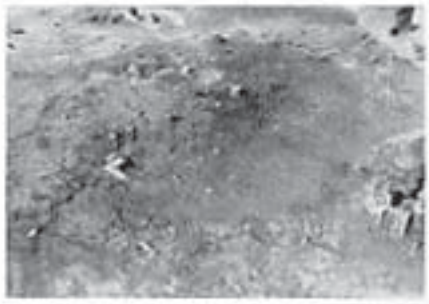
←国道7号線バイパス
（環状7号線）

調査中の状況
（北東→南西）

調査前の状況
（西→東）

調査中の状況
（西→東）

写真1　A区調査区域全景



遺構確認面

遺物出土状況

柱穴状ピット検出

第1号炉

第3号炉

第2号炉

第3号炉 下部ピット

第2・3号炉 重複確認

写真2　A区第2号竪穴住居跡

写真３　Ａ区第１号埋設土器遺構

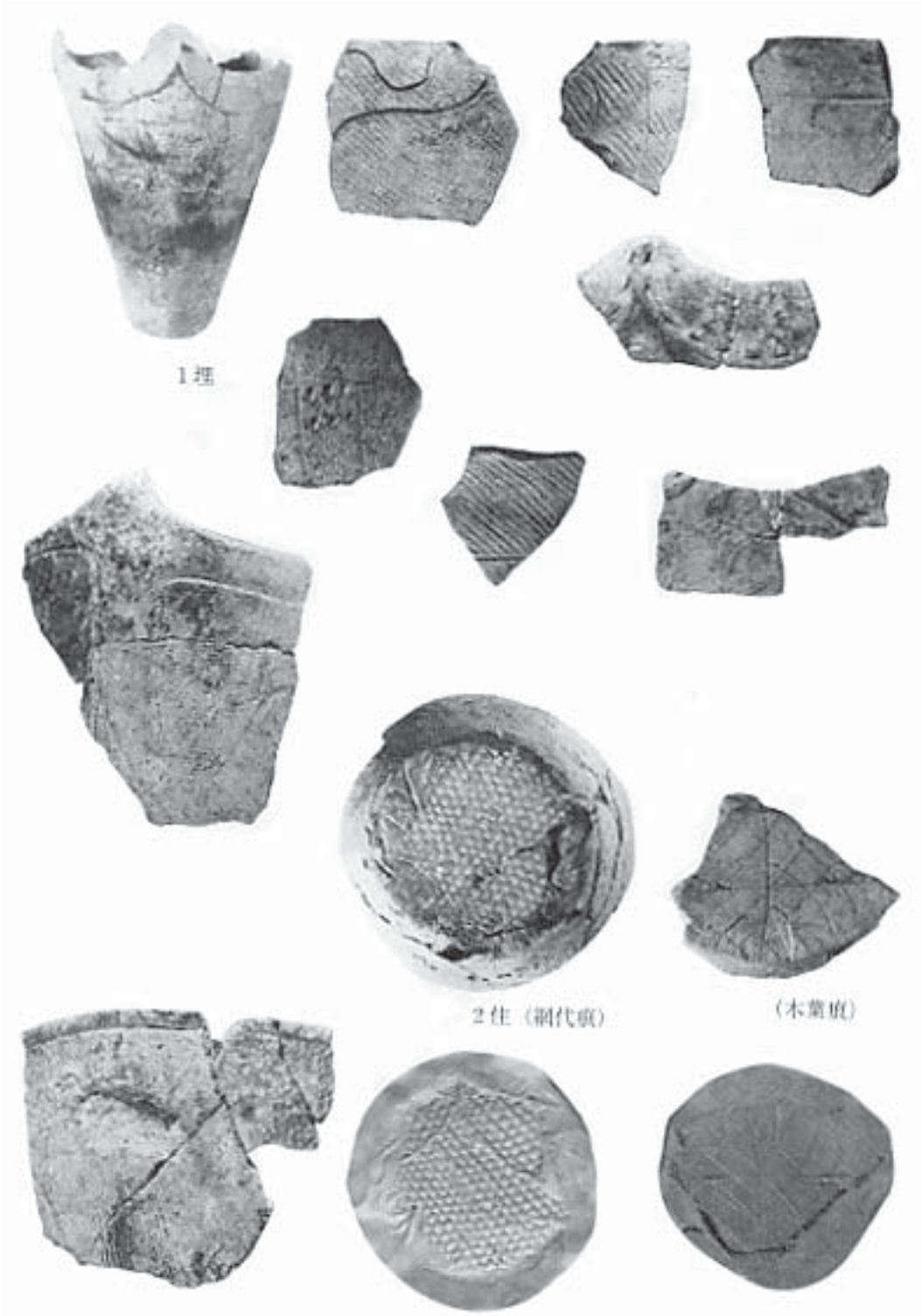


写真４　Ａ区出土遺物（縄文時代中期末葉の土器）

写真５　Ａ区出土遺物（縄文時代晩期の土器）

写真6　A区出土遺物（石器及びその他の遺物）

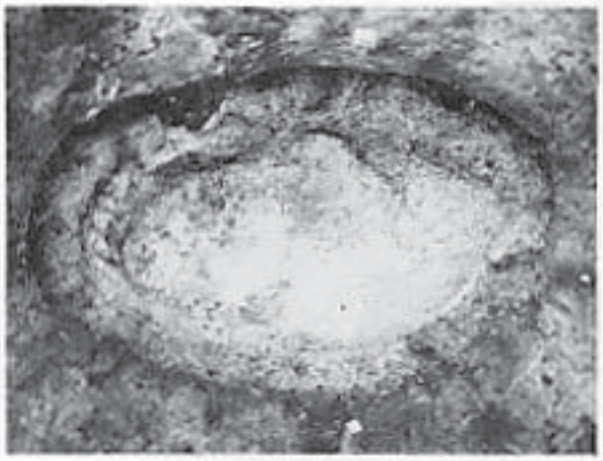
D区遠景

D区近景

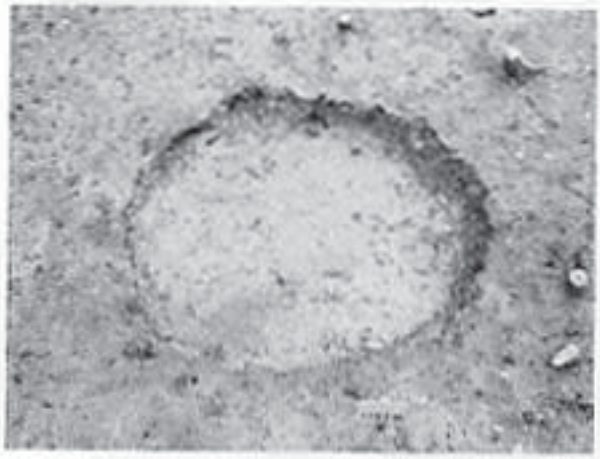
遺物出土状況

写真7　D区遠景・近景

第1号竪穴住居跡



第10号土壙



第11号土壙

写真8　D区竪穴住居跡・土壙

写真９　Ｄ区出土遺物（土器）

写真10　D区出土遺物（石器・土製品）

B区 近景

B区 トレンチ

B区 土層確認

C区 近景

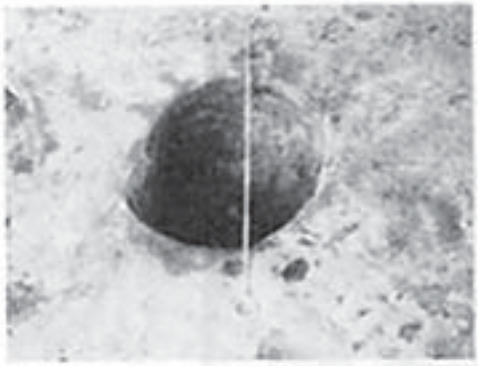
C区 トレンチ

写真11　B区・C区近景

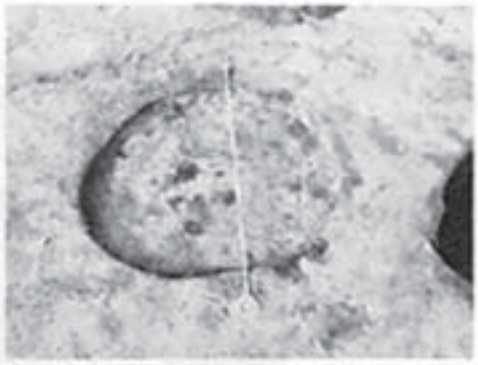
E区 近景

E区 土層確認

2号土壙　　1号土壙



3号土壙



4号土壙

写真12　E区近景・土壙

出土遺物（土器）

出土遺物（石器）

現地見学会

現地見学会

写真13　E区出土遺物・現地見学会

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965『四ッ石遺跡調査概報』
〃	3	1967『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979『螢沢遺跡』
		1983『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983『山野峠遺跡』
〃		1985『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『横内城遺跡発掘調査報告書』
〃		1988『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書	第16集	1991『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993『市内遺跡発糊調森報告書』
〃	第20集	1993『小牧野遺跡発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第18集

三　内　丸　山（2）遺　跡　発　掘　調　査　概　報

発行年月日　平成5年3月31日

発　　行　青森市教育委員会

〒030　青森市中央一丁目22－5

TEL　0177－34－1111

印　　刷　東北印刷工業株式会社

〒030　青森市合浦一丁目2－12

TEL　0177－42－2221